探偵学園 2年A組第5班

けにゃ～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探偵学園2年A組第5班

【Nコード】

N2439Z

【作者名】

けにゃく

【あらすじ】

・・・日本、以前までは世界で最も安全な国とされていた。いや今でも世界で最も安全な国だ。

だが、その中身は不況、天災、政府の不安定さ、etc・・・。
色々な要因が複雑に絡まりあい犯罪件数が安全神話が囁かれていた頃の

数十倍、数百倍にもなってしまった。

警察や自衛隊は大きな事件や事故に狩り出され、一小市民の安全を保障する者は誰一人いなかった。

そんな時に現れたのが探偵養成学園。

この学園は、探偵を養成、輩出し、小さな事件や事故などを解決、阻止しようという政府が打ち立てたプロジェクトである。

このプロジェクトは見事に成功し、犯罪率は劇的に低下した。

この話の始まりはプロジェクトの成功の数年後から始まる。

普通の家に生まれ、普通に育ち、普通の学校に通っている青年
人見誠司^{ひとみせいじ}。

彼が何か自分を変えたい、変わりたいと思ひ学園に入学。

そこから話が始まる。

第5班結成！【1】（前書き）

初めての投稿作品です。

表現など稚拙な所は多々ありますが、指摘などして頂けると嬉しいです。

では、どうぞ最後までどうぞお付き合い下さい。

感想なども頂けると嬉しいです。

第5班結成！【1】

両側に超高層ビルが立ち並び、その隙間を縫うように作られている路地裏の迷路のような道。

そんな人気のない道を全速力で走る男が一人。

「くそっ！捕まっただまるかよっ！」

悪態をつき、息を切らせながら走る男は時々、後ろを振り返りながら誰か付いてきていないかを確認している。

最初のうちは全速力だったが、走れば走るほどに速度は落ち、今は心臓と肺は悲鳴をあげ、手足の力は走るたびに抜けていく。

どのくらいの間走ったのか、記憶を掘り起こすことも面倒になった男は

とうとう走るのに必要な体力をすべて使い果たして

倒れこむように近くにある物陰に隠れた。

そして、そこで小休止。

追っ手を撒けたのか、しばらくしても誰も現れない。

「ふう……。」

自然と男から安堵のため息が漏れる。

「な〜に、安心しちゃってんのよ！」

ふいに上空から声が聞こえた。

男が上を見上げるとビルの2階の非常階段から女の子が自分の目の前に飛び降りた。

「黒！！」

「な、な、なっ！！」

男は上を見上げた時に見えた、とてもありがたい物の色を咄嗟に言っってしまった。

しまった、と思った時には女の子はすでに顔を真っ赤にしてこっちに突っ込んできた。

男は瞬時に立ち上がり逃げようとするが、男よりも素早い動きで女の子の手が男の手を掴んだ。

そして、女の子は男の懐に入り込むと、そのまま一本背負い。

「今日も絶好調ね！」

キラッと、擬音が聞こえるくらいの眩しい笑顔で微笑んだ。

そして、気を失い地面にボロ雑巾のように転がっている男の両手を手錠で拘束。

「よっしゃー！私の大事なところ見た罪で犯人を逮捕ー！！さっ、学校帰ろーっと！」

女の子は、大声で勝ち鬨どきをあげて男を肩に担いで学校へと引き返した。

そして、数時間後――

「――ろ！！」

「――きる！！」

「起きろー！ー！！！」

はっ、何かを思い出したように男は飛び起きた。

「黒！！」

そして、意味の分からない言葉を発して周りをキョロキョロと見渡した。

ベッドがたくさんあって、先生が使う大きい机が1つと長机とパイプイスがちらほらと見える。

見た感じ保健室だが、ちよっと豪華すぎるような気もするが。そんな事より、さつきからずつとこっちを見てくる人が二人、女性用のスーツに身を包んだ、いかにもキャリアウーマンのような女性と

さつき思いつきり一本背負いを喰らわされた女の子、その子の髪は金色で長く、その髪をツインテールにしているさらに、容姿端麗で、例えるなら人間ではなくて人形といったところか、

そのぐらいに綺麗な女子だった。

無意識のうちにならずつとその子のことを眺めてしまっていた。

「あらやだ！転校生君はさつきからずつと私を見て・・・、惚れちゃったの？」

うん、容姿はともかく中身はちよつと残念な子だった。

あ、この子が黒だった子か・・・ちよつと得した気分。

そして転校生君とは、さつきまで逃げ回ってた俺・・・人見ひとみ誠司せいじとりあえず、黒の名前知らないし自己紹介と挨拶でもしようか。

「俺は、人見誠司、よろしくな。」

「私は、エミリー・クインよ！エミリーで良いわ、よろしくね誠司！」

金髪ツインテールの女の子の名前はエミリー、ちょっと残念な子だけど性格は良さそうなので仲良くやっていけそうだ。

「あつ、それとこっちは先生ね！」

「こっちのつて、失礼ねえ……。」

「まあまあ、気にしない！気にしない！」

キャリアウーマンな女性はどうか先生らしい。まあ、知ってたけど一応、再確認。

「じゃ、そろそろ教室戻りましょうか！昼休み明けの授業始まつちやうよ！」

あと、誠司の自己紹介は放課後のHRでするからね！」

ふむ、俺が学校から逃げ出したのは1時間目の始まる前だったしすぐに捕まったから、結構寝てたんだな……。

いや、それにしてもエミリーだっけか？可愛かったな、黒だったし……。

いやいや、俺の好みの色は黒ではなく、もっとこっぴんくとか白とか可愛い感じなので……

「こら誠司！早く行くよ！」

「あ、ああ……。」

なんか色々考えてるのバカらしくなってきたな……。
とりあえず、行くか！

誠司は大きく伸びをしてベツトを飛び降り脇に綺麗にたたまれていた自分の制服の上着を着てからもう一度体全体を使って大きな伸びをした。

今日からお世話になる学校、探偵養成学園。

その期待と不安を胸いっぱいにエミリーの後を追いかけた。

第5班結成！【2】

エミリーの後に続いて教室、2年A組に入った誠司は、クラスメイ
トの視線に晒されながら

自分の席を探すために教室をウロウロとしていた。

まさに、挙動不審の一言に尽きる。

エミリーに助けを求めようとしたが、俺の事なんかお構いなくさっ
さと自分の席に座って

周りの友達とだべり始めた。

なんて、酷い奴。

「おい、転校生！こつちだよ！」

救いの一声。

声の主を見ると、身長は180cmといったところか、体格はガツ
チリとしていて

鍛えられている風に見える。

「ありがとな」

そう言うと、声をかけてくれた奴の後ろの席に座った。

そこは、一番窓側の列の一番後ろの席だった。

隙間風が入ってきているのか、心なしか教室に入ったときよりも寒
気を感じる。

「俺は、神戸かんべ 良介りょうすけ、良介って呼んでくれ、よろしくな！」

「ああ、よろしく、俺は人見誠司だ」

一通り自己紹介と挨拶をしたところでいきなり良介は謝罪をした。

「朝の事は、なんつーか、悪かったな・・・」

「はは、いいさ、気にしてない」

朝の事とは、つまり俺がいきなり追われたこと。

そう、転校してからの初めての登校日。

期待に胸を膨らませ朝のHRに出席したら、いきなりだったもんな・・・。

・・・朝のHR

「え、今日は転校生がなんと2人も来ています！皆さん、歓迎しましょう！」

先生がそう言うと、クラスの皆はポケットから携帯や財布を取り出して鞆にしまう。

さらには、上着を脱いだり、準備運動を始めたりする奴もちらほら・・・。

一体、今から何が起ころうというのか。

「ほら、あんたたちも壊れたり、汚れたりしたら嫌な物は鞆に入れなさい。」

先生が俺たち2人にそう言った。

なんか、嫌な予感しかしないのですが・・・。
それっきり、先生は時計と睨めっこしている。

俺は、ふと横にいるもう一人の転校生が気になって、横を向いた。

その時の事はこれから何年たとうとも忘れる事はないだろう。
もう一人の転校生の彼女は、髪は黒色のロング、白く透き通るよう
な肌で

触つてもいないが、もちもちでしっとりしてそんな感じがする。

それに、微笑んでる顔がとても綺麗だった。

でも、その綺麗な顔の瞳は、何かを諦めた様な、愁いてる様な、そ
んな悲しい目をしていた。

そんな目が逆に完璧さの中に見える唯一の欠陥のようで

例えるなら、ミロのヴィーナスの不完全さの様な、そんな美しさで
絵になっていた。

それが、こんな何の変哲もない教室ではなく、舞い散る桜の下とか
でこんな顔されたら

俺はどうなってしまうのだろうか、そんなくだらない事を
考えていた時に「それ」はいきなり始まった。

「さあ、学園式の歓迎だ！転校生の2人逃げなさい！！」

先生がそう言うともう一人の転校生はもう隣にはいなくて
そこにいるのは状況の読み込めない俺だけだった。

「え？先生、逃げろって？」

「話聞いてなかったの？1分後にクラスの皆で追いかけるから逃げ
なさいって言ったじゃない！」

ほら、後40秒よ？」

うん、なんとというかスゴい歓迎の仕方だな。

意味が分からないがとりあえず俺は教室を飛び出して外に出るため
に階段を目指して走り出した。

「おーい！誠司く〜ん、いきなり無視ですかー！？」

おっと、完全に回想モードに入ってた良介の話をもったく聞いてなかった。

「悪い、もう一回言ってくれないか？」

「だから〜、もう放課後のHRで誠司、自己紹介まだだろ？だから、してこいって言ってたんだよ！」

はい？放課後のHR？

俺は回想で2時間分の授業を使って、しかもその授業の記憶もまったくないという事ですか？

都合の良いような気もするが事実なので仕方ない。
俺は席から立ち上がり先生のいる教壇に向かった。

第5班結成！【3】

教壇に登り一度、深呼吸。

教室の中は物音1つない、誰もいない訳ではなくて

今から始まる俺ともう一人の転校生の自己紹介に全力で耳を傾けてくれているからだ。

これは、失敗できないな……。

そして、もう一度、深呼吸をしてゆつくりと口を開く。

「え〜と、俺の名前は人見誠司、前の学校はこの学園と同じ県内にある、

普通の公立の学校です。

探偵の事、何も知らないですがやる気だけはあります！

こんな奴ですが、皆さんよろしくお願いします。」

話し終わった後の、一瞬の沈黙に失敗したかと思わされたが

何の心配もなかった、すぐ後には皆の拍手とよろしく、という声でクラスが賑わった。

その次に、教壇に登ったのもう一人の転校生。

やっぱ、綺麗だな・・・いや、そうじゃなくて俺も自己紹介聞かないとな。

後ろ髪引かれつつも、仕方なく自分の席に戻って聞く体勢に入った。やがて、もう一人の転校生が淡々と話し出す。

「ほしかわ星川 りん凜、よろしく」

なんていうか、無愛想な奴だな、こんなに綺麗なのに。

じゃなくて、もう一人の転校生、星川のせいで教室は一気に冷え切った。

誰か、この居心地の悪い空気を何とかして欲しい。

「えーと、2人とも自己紹介ありがとね、さて、2人には今すぐ決めて欲しいことがあるの」

先生、ナイスフォローだぜ！！

俺は心の中で叫んだ。

「この学園は班体制を取っていて実習科目と実践科目、つまり、
本日の探偵の仕事をする時には

班で行動してもらうので、班の人数は大体、3人が4人ぐらいで
構成されているわ、それで、君たちには・・・」

そこで、先生の言葉を遮る様にエミリーが立ち上がって発言した。

「で、先生は、この2人を私の班に入れようって事ですか？」

エミリーの目は、さっき保健室で見たときと違って、
非難する様な怒っている様な、そんな目で先生を睨みつけていた。
その迫力は凄まじく、エミリーの周りのクラスメイトたちはすぐに
その場から飛びのいた。

でも、先生はそれに一步も引かず反撃した。

「そうよ、あんた、いつまで経っても1人じゃない！だから、この
機会に・・・」

「余計なお世話よ！！」

再び、先生の言葉を遮ってエミリーは叫んだ。

「ちょっと、エミリー！待ちなさい！話はまだ終わってないわ！」
そのまま、教室を飛び出したエミリー。
そこで今日の放課後のHRはお開きとなった。

「なあ、良介、エミリーのやつどうしたんだ？」

「まあ、色々あって、・・・な？」

良介も何やら浮かない顔をしている。
エミリーには、何か人には言えない事情があるのか。
あの笑顔の裏側にどんな隠し事をしているのか気になった。

「ちょっと、人見君、いいかしら？」

仕方なく、帰宅しようとしたところに先生からお呼びがかかった。
無視するわけにもいかず、渋々、先生のところへ向かう。

「何の用事ですか？先生」

先生は何も言わず、手招きだけをした。

俺に付いて来いって意味かな？

とりあえず、先生の後を付いていく。

階段を上り、さらに上り、ついには最上階まで来てしまった。

先生はポケットから鍵を取り出し、最上階の階段を上りきった
ところにある扉を開ける。

扉を開くと、夕日に照らされてオレンジ色に染め上げられた屋上。
周りには何もなく、ただ落下防止のフェンスだけが張り巡らされて
いただけだった。

先生は、そのフェンスに手をかけて校内を見渡す。

俺も先生に釣られて同じ動作を取った。

「エミリーはね、とても傷ついてるの」

先生は急に話しました。

「細かい事情は、私から言えない、でも傷ついてるのは確か、その傷のせいで彼女は人との交流を避けているわ」

人との交流を避ける、か……。

対人関係で何かあったのか？

「だから、新しい転校生のあなたたちにエミリーを変えて欲しくて、救って欲しくて……」

先生は淡々と話しているように見えたが、夕日に輝く一筋の涙を俺は見てしまった。

生徒の為に涙を流せるいい先生だな、と思った。

「ごめんね、理由も何も話せないのに、迷惑だったわよね……？」

俺は、ふう、とわざとらしく深くため息をついた。

「で、俺は何をすればあいつを救ってやれるんです？」

先生は、とびつきりの笑顔でありがとうと言って俺を抱きしめた。いや、先生、俺の方こそありがとう。

あなたのその柔らかくて大きくて素敵な物が俺の顔を覆っている。今までの人生で一番の至福の時かもしれない。

「あつ、急にごめんね、つい嬉しくて・・・」

先生はそう言うと、俺を胸から解放した。

名残惜しかったが仕方ない、それにこれ以上されたら暴走してしまいそうだった。

「エミリーはね、人と関わる事を積極的に避けているわ、だから、なんとかして彼女の

班に入って欲しいのよ」

「で、どうすれば班のメンバーに認めて貰えるんですか？」

「まずは、新しく参加するメンバーの参加表明とその班のリーダーの同意、

これでOKだわ

で、エミリーの班はエミリーしかないから班のリーダーはエミリーね」

これは、中々難航しそうだな。

人との関わりを積極的に避けているエミリー。

そのエミリーをなんとか説得して班のメンバーになるのか。

「つまり、エミリーに認められればメンバーになれるって事か・・・

」
「まあ、そうなるわね」

目標は出来た、だが、その目標をどうやって達成するかだ。

まあ、今は深く考えても仕方ないか、明日とりあえずエミリーと話してみよう。

「あ、それとね、凜ちゃんも一緒に班に入れてあげてよね！それじゃ、よろしくうー！」

先生は、それをいうと逃げるように屋上から消えうせた。

あの無口な奴をどうやって説得しろと？

それに、そいつもエミリーに認めさせなきゃいかんのか？

無理じゃね？俺は、心の中で悪態をつきながらもやる気は満タン、これっぽっちも失ってない。

何故なら、いつも通り、普通、そんな日常に耐えかねてこの学園に来たのだ。

初っ端から、面白い展開になってワクワクしているのだ。

「さって、明日からエイミー攻略作戦開始だな！」

そう言って、俺も屋上から出た所で思い出した。

屋上の鍵どうすればいいの？

第5班結成！【4】

――翌日

ジリリリりと、目覚まし時計が静かな朝を打ち壊す。

「ふわあぁ〜」

大きなあくびを1つして、枕元に置いてある目覚まし時計を見る。

時刻は午前7時00分、学校は8時30分から開始で

学校までは自転車です、30分程度、支度に1時間も使える。充分に余裕のある時間だ。

よし、と少し気合を入れてベットから降りる。

そして、朝日を遮っているカーテンを豪快に開ける。

眩しさに目を覆いたくなるくらいの光が部屋の中に差し込む。

「今日も、いい朝だな」

小さく呟くと、昨日学校帰りにコンビニで購入したパンとインスタントコーヒーを朝食としていただく。

実家は、この学園と同じ県内にあるが、学園とはかけ離れている為に今は、一人暮らしをしている。

部屋は、一人暮らしには少しもったいないぐらいの広さ。

国から学園に大量の援助金が出ているので、格安の値段で借りる事が出来る。

朝食を手早く済ませると洗面所で歯と顔を洗い、制服に着替える。

時刻は、7時30分、出発にはまだ少し早い。

が、今日はエミリー攻略作戦の開始日、エミリーが学校に来ているかも

しれないので、早速学校へ向かった。

何事もなく無事に学校に到着。

下駄箱で上履きに履き替えてA組に向かう。

まだ、時間が早いのか教室に向かうまでの廊下ではほとんど人を見かけなかった。

教室のドアを開けると案の定誰もいなかった。

「エミリー……」

誰もいないと思ったら、教室にはポツンと1人で机に座るエミリー。エミリーは、俺の声を聞き取ったのか立ち上がり教室から出ようとする。

「エミリー、あの、俺と星川をお前の班に入れてくれないか？」

エミリーは一度立ち止まり、こっちをチラリと見たがそのまま無視して

俺の脇を抜け教室を出ようとする。

その行動に対して、とっさに手を掴んでしまった。

「待てよ、何がそんなに気に入くないんだ？」

エミリーの態度を見て、少し高圧的な態度で出てしまった。

「……、別に気に入くないわけじゃないわ」

「じゃあ、何で避けようとする!？」

「誠司には分からないよ」

そう言うと、俺の手をそつと優しく解いて教室を出た。激しく振り払われたら文句の一言でもでたのだろうか。あまりの優しさに驚いて、追いかけることもできなかった。

うーん、そこまでして避ける理由がまったく分からない。

とりあえず、そのまま突っ立てる訳にもいかない。自分の席へ移動して、第一回作戦会議を開催。

今までのエミリーの言動と行動を思い返す。

初めて会った時は黒・・・

もとい、残念な感じはしたが友好的だったと思う。

特に積極的に人との関わりを避けているような奴には見えない。でも、先生から見れば避けている・・・。

教室でも、友達とも話していたし避けているようには見えない。そこまでは、第一印象の通りのエミリーだったな。

エミリーの態度が急変したのは、班にメンバーを入れる話が出た時・・・か、なら、態度の急変の原因は

俺と星川が班に入るということになるのか？

待てよ・・・？

エミリーは、班の話が出るまではクラスメイト達とも友好的だった。そんな奴が最初からずつと1人ぼっちでいるだろうか？

いや、そんなはずはない。

少なくとも、友達が班にエミリーを誘うはずだ。

もし、仮にその誘いをエミリーがずつと断り続けてきたのならクラスメイト達とあんなに友好的になるだろうか？

むしろ、逆にクラスメイト達がエミリーを避けようと思うはず。なら、考えられるのは、以前のエミリーの班は一人じゃなかった。

だが、何らかの理由により班の人数が減りエミリーが一人ぼっちに。その何らかの理由が、先生の言うエミリーの人との関わりを避けるという行動に繋がっているはずだ。

と、すれば問題はその理由をどうやって聞き出すか。
とりあえず、休み時間と昼休みを使って
クラスメイトにでも聞いてみるか・・・。

第5班結成！【5】

学園の教室、校庭、体育館、学園中に鐘の音が鳴り響く。人々は机を寄せ合いひと時の休息を得る。

……つまり、昼休みっていうことだ。

そして、俺は転校して来たばっかなのでメシを一緒に食う相手もない。

ちなみに、エミリーの調査だがすべての休み時間に聞き込みを行ったが

誰も、何も話してくれなかった。

もちろん、一番最初に話しかけてくれた良介に聞いても答えは皆と同じ。

そういう訳で、心が折れそうなので、この昼休みは昼食をしっかり取り

休憩するつもりだったが……。

一緒に食う相手がいない……、良介も気付いたらどっか行ってるし。

他に男子がいないか、と聞かれたらそうではないのだが自分からは中々声を掛け辛いのだ。

そこでふと目の端に止まったのがもう一人の転校生

……星川凜だ。

どうやら、星川も一緒にメシを食う相手がいないのか一人でぼーっとしている。

これは声をかけるべきか？お互い転校して来たばっかだし仲良くなるかも……

声をかけるしかないな、そう思って星川に近づいた。

「よっ！一人か？一緒にメシ食わないか？」

上の空だった星川が俺の声に気付いて返答をくれる。

「いい・・・」

「いって、嫌って事か？」

星川は無言で頷く。

しかも、こっちを向かずに。

「そう邪険にするなよ、あ、他にもうメシ食う約束してる奴がいるのか？」

また無言で今度は首を横に振る。

「じゃあ、一緒に食おうぜ！お互い一人ぼっちだしよ？」

またも、さっきと同じ動作。

「こりゃ、無理か？そう思ったときに近くにいた女子が話しかけてくる。」

「止めときなよ、えっと・・・、人見君だっけ？私たちもさっき声かけたんだけど、嫌の一点張りなのよ？」

転校初日に同性に嫌われるとは災難な奴だな、こいつは・・・。
まあ、でも嫌われては無いと思うにしろ、今、こいつと
同じ状況の俺って・・・。

「いや、けどな・・・」

色々と考えていたせいか、生返事で返してしまう。

「あゝ、そ、じゃあ、勝手にすれば？一応、忠告はしたわよ？」

なんか、俺も嫌われてないか？

まあいい、とりあえずなんとしてもこいつを誘わなければ
なんか、負けた気がして気に食わん。

「おゝい、星川、どうやってたら一緒にメシ食ってくれるんだ？」

「ほつといて」

冷めた返事で返してくる。

こうなりゃ、ヤケだ！！

「よし、じゃあ、お前の望む物を昼飯として奢ってやるっ！！」

この言葉にピクツと星川の体が硬直したのが分かる。

そして、ゆっくりとこちらに顔を向けた。

「ほんとに・・・？」

なんか、目がうるうるしててめっちゃ可愛いのですが・・・。

「ああ、ホントだ！」

頼むから、安く抑えてくれよ！

俺の昼飯と生活費を大幅に削らなくちゃいけないなんて嫌だぜ！！

「・・・」

「え、なんて？」

まったく聞き取れなかった。

「うどんが・・・食べたい・・・」

「そんなんでいいのか？」

今度は少し大きめに、それでも遠慮してなのか耳を傾けてなかったら間違いなく聞き逃す音量でそう言った。

「うん」

「じゃあ、食堂いくか！」

そう言うと俺は教室のドアに向かって歩き出す。

星川は俺の2、3歩後ろをとことこと付いてくる。

なんて、可愛い奴なんだ！！

・・・食堂

そう、そこは食堂という名の戦場で常に人は他人より早くメシを食す為に

人を蹴飛ばし、踏み越えるという凄惨な場所・・・。

ではなく、わりとのんびりしている、だが、決して

閑散としている訳ではない。結構この雰囲気好きだな。

この食堂は、まず食券を買ってカウンターに持っていくという方式らしい。

星川は、食券販売機と睨めっこしている。

俺が千円札を投入してから結構経つぞ？

「星川く、なんでもいいんだぞ？他に食いたいのあったらそれでもいいんだぜ？」

「きつね・・・、お肉・・・、天ぷら・・・」

どうやら星川は目移りしたのではなく、「何」うどんにするのかで迷っているらしい。

「決めた・・・」

そう呟いて星川は「きつねうどん」と「天ぷらうどん」の両方のポタンに

手を置いてそれを同時に押す。

この際、全然決めて無いじゃん！というツッコミはなしにする。出てきたのはきつねうどんの食券。

星川はそれを少し残念そうに、でも満足そうな顔で手に取るとカウンターに持っていった。

出てきたのと違うほうが急に買いたくなるんだよな分かるよ・・・。で、俺は天ぷらうどんを購入。

星川のやつ、ずっと迷ってたから一口あげようと思って天ぷらうどんにした。

第5班結成！【6】

食券をカウンターに持って行き天ぷらうどんと交換。

星川はと言うと、すでにきつねうどんと食券を交換し終えて勝手にカウンター近くの4人がけのテーブルで座っていた。

そして、俺も星川の向かいに座るべく歩き出す。

「誠司！」

その時、聞き覚えのある声が後ろからかけられた。

「良介か？どうした？」

「実は、お前に話があつてな・・・」

「そうか、すまんが今から星川とメシ食うんで後でいいか？」

なにやら、深刻そうな顔をしている。

さすがに、メシの片手間に聞くのは悪いだろうと思ってそう言った。

「いや、今聞いて欲しいんだ！」

「そうか、じゃあ、悪いがメシ食いながら話聞くぞ？」

「ああ」

そう言って俺は、良介を星川の座る席へ案内した。

俺と良介は隣り合って星川の向かいに座った。

「星川、良介も一緒だけどいいか？」

星川は俺の言葉を無視して黙々と、そして、しっかりと味わうようにうどんをすすっていた。

一応、断り入れといたし大丈夫だよな？

「で、話って？」

俺は、改まって良介の話聞く。

「話つてのは・・・実は・・・なんというか・・・」

うーん、なんだかハッキリしないな・・・。

余程、大事な話で緊張してるのか？

「・・・すまんかった!!」

いきなり大声で謝られる。

食堂に居た人の視線が俺へ釘付けに。

は、恥ずかしい・・・。

「おいおい、何で急に謝るんだよ？」

「いや、俺はお前に謝らなくちゃいけないんだ！」

「だから、何でって!？」

「・・・エミリーのことだ」

エミリーのこと？」

頭に疑問符が大量に浮かんだ。

何故、良介からエミリーの事で謝らなければならない事がある？

「実は、俺はエミリーの過去を知ってる、というか、A組の皆知っているんだ・・・」

つまり、エミリーの過去を知っているが隠してたって事を謝りたかった訳だな。

「エミリーはそのせいで、深い傷を負った、だから誰もそれを聞かないし、癒そうともしない、皆、時間に任せてるだけだ。でも、俺はそういうのは嫌なんだ、だからお前にすべてを話す！エミリーに怒られるの覚悟で、それでお前になんとかして欲しいんだよ！..!」

「そうか・・・」

「それで、エミリーは昔・・・」

「ちょっと待った！..!」

エミリーの過去を語りだそうとする良介に待ったをかける。だって、エミリーは自分の過去を話したくないから俺を避けた。なのに、他人からその過去を聞きだすのってズルじゃないか？少なくとも俺はそう思う。だから、これは他人からではなくエミリーから直接聞かないといけない話なんだ！

「良介、お前の気持ちは嬉しい。けどな、それを聞いたら

俺は負けちまう、いや、過去を聞いてエミリーを癒してあげられるかもしれない、けど、それはズルで勝ちだけど勝ちじゃないん

だ
」

良介は、俺と先生の間で交わされた約束の事は何も知らない。だから、勝ち負けとか言ってる俺の顔を呆けた顔で見ている。それでも、俺は続ける。

「だから、こうしてくれないか？協力するって事に」

「・・・」

沈黙、良介は未だに呆けた顔で俺を見ている。

訳の分からない事言ってる引いたのか!?

なんとか言ってくれよ良介!

「・・・も、も、・・・」

も？

「勿論だっ!!任せとけ!!俺は何をすればいい!？」

一気にまくし立てる良介。

とりあえず、引かれてなくて良かった。

それにしても、こいつ良い奴だな、ちよつと感動。

そんな事は置いといて、早速、良介にエミリーを今後どうするかについて話す。

「エミリーは俺の話を聞こうとしない、だから・・・」

勝負だ・・・。

俺は、俺と星川の入班をかけてエミリーと勝負する。
時間は、今日の放課後、つまり、もう残された時間は
数時間しかない、その間に出来るだけの用意をして
エミリーと戦う、そして見事、入班を認めさせる。
俺は、熱く良介に語った。

「で、良介には放課後までの時間を使ってある事をして貰いたい」

「ある事って!？」

良介は、キラキラした瞳で俺との距離を詰めて聞いてくる。
こいつ・・・、楽しんでやがるな。

俺の熱い語らいに心打たれやがって!!

などど、勝手に更に熱くなる俺。

でも、しっかりと伝えなくちゃいけない事は伝える。

「ある事とは、・・・」

「え?それだけで良いのか？」

良介が今度は不満そうな顔で聞き返してくる。

だが俺は、それにしっかりと、そして、断固とした意志を
持ってこう言った。

「後は全部、俺に任せてくれれば良い」

そう言うと、良介は今から準備だ〜!と張り切って教室に戻った。
なんだかんだ言って、良介、お前やつぱ良い奴だな。

今度は、ずっと無口だった星川の方を向いて話す。

「で、お前の学園生活かけるけどいいか？」

「勝手にすればいい、きつねうどんと天ぷらうどんのお礼」

ちよつと、俺に気を許したのか、最初の頃とは少し違ってほんの少しだけ話してくれるようになった。

あれ・・・？

天ぷらうどんって？

俺は自分が運んだはずの天ぷらうどんがしつかりと、汁の一滴も残さず完食されていることに今更気がついた。

「汁の一滴は、血の一滴・・・」

ぼそつと、これまた聞こえるか聞こえないかぐらいの音量でそう呟くと、星川は2人分の食器を持って席を立った。

「授業始まる、行く」

「あ、ああ・・・」

「あ・・・、忘れてた」

おい、まさか、まだ食い足りないとか言うんじゃないだろうな？さすがに、それは勘弁して頂きたい・・・。

「うどん美味しかった、ご馳走様」

そう言った星川の顔はちょっと、ほんとにちょっと、そう、星川のいつも話す時の声の音量と同じぐらい微かながら微笑んでいた。

「それは、食堂のおばちゃんに言えよ・・・」

口では悪態をついたが、本当は照れくさかった。

だって、無表情で無口な星川が、最初見た時の儂げな、でもキレイだった顔よりも、こんな可愛い顔出来るって知らなかったから。

俺の頭の中での、今までの星川の印象が音を立てて崩れ去り新しい星川がすぐに構築されていく。

そう、暗いし、口数も少ない、けど、礼儀正しくて、なにより・・・笑顔がめっちゃくちゃ可愛いっていう風に。

だから、何としても負けられない、俺は勝って星川と一緒にエミリーの班に入って、エミリーと仲良くなって、それで、星川とエミリーも仲良くなって、星川の笑顔の可愛さを皆に布教しなければならぬから、いや、ホントは独占したいけど。

もう、勝負する内容も作戦もあらかた決まっている。

後はそれを煮詰めて、より限りなく100%に近づけるだけ。泣いても笑っても、決戦は放課後。

俺は、勝つ・・・。

第5班結成！【7】

昼休み後の授業はまったく耳には入ってこなかった。

授業は、放課後に控えるエミリーとの対決に備えての一人での作戦会議。

大体の方針は決まっている、後はそれを煮詰めていくだけだ。

休み時間になっても席から一步も動かず思考を続けた。

そして――

放課後がやってきた。

放課後のHRをするために先生が教室に入ってくる。

そして、いつも通りの手順でHRが進んでいく。

「では、今日のHRはここまでです、皆さん気をつけて帰宅してください。」

先生の解散の合図が出ると、俺はエミリーの席にすぐに移動する。

エミリーは、気づいているのに、あえて、気づかないフリをしている。

明らかな拒絶。

だが、俺はそれに屈せず話しかけた。

「エミリー、俺と星川をお前の班に入れてくれ。」

やはり、エミリーは無視を続けている。

「頼む、エミリー俺と星川をお前の班に入れてくれ！」

再度、同じ事を繰り返す。

それでも、エミリーは無視を続ける。
そろそろか・・・

「なら、俺と勝負してくれ！」

この言葉に俺の言葉を聞き流していたはずのエミリーのが、「こちらに
耳を傾けた。

「勝負・・・？」

よし、掛かった！

「ああ、勝負だ、俺が勝ったら俺と星川をエミリーの班に入れてく
れ。」

「負けたら？」

「きつぱりと諦める、今後一切、この事は言わない。どうだ？」

「いいわよ、で、何で勝負する？」

よし、ここまでは順調に事が運んでいる。

後は、俺の提案に乗るかどうか・・・。
だが、ここで焦ったらダメだ。

俺は顎に手を当て悩んでいるフリをした。

その後、いかにも今、思いついたように話し出す。

「エミリー、こんなゲームを知ってるか？」

お互いに数字を言っていき、最後に21を言った方が負けになる

ゲームなんだが。」

「ええ、知ってるわよ。」

「よし、ならこれで勝負だ！」

「ちょっと待った。」

エミリーが待ったをかけたきた。

「それ、先攻、後攻、私が決めてもいい？」

「ああ、問題ない。」

これは、エミリーめ、必勝法を知っているな。だが、良いぞ、そこそこ順調に事は運んでいる。

「じゃあ、校庭で待ってる。」

校庭に出る。

そこには、多数のクラスメイトがいた。良介、良くやってくれた。

この作戦には勝負を見届ける立会人が必要だ。俺が出てきた後にすぐエミリーも出てくる。

「エミリー、約束忘れるなよ。」

「そつちこそ。」

互いの発言が終わった後に一瞬の沈黙が訪れる。

心臓がバクバクと音を立てる。
だが、ここで焦ってはダメ、気を引き締めて何度も確認した
作戦の手順を踏んでいく。

「じゃあ、詳しいルール説明だ。」

互いに1回で言える数字の数は3つまで、そして、最後に数字を
発言してから3秒後に発言権が相手に譲渡される。

これでどうだ?」

「問題ないわ。」

「よし、なら一度予行練習でやってみようか。」

俺がそう言つと、本番ではないのにエミリーの顔つきが変わった。
練習でも本気で来るようだ。

「エミリー、先攻か後攻どっちだ?」

「後攻でいいわ。」

迷わず後攻で来たか。

これは、間違いなく必勝法を知っているな。

「じゃあ、いくぞ、1、2、3。」

3秒の静寂の後にエミリーが答える。

「4。」

そして、また3秒の静寂。

「5'6。」
「7'8。」

「17。」

「18、19、20。」
「くっ・・・、21。」

俺は、21を言うとあからさまに不安と悔しさが入り混じった様な顔を

エミリーにアピールする。

エミリーは、そんな俺の顔を見て余裕の表情だが、それで良い。

この作戦は、いかに隙をつけるかだ、慢心して心に隙が出来るほど良い。

「じゃあ、本番いくか、順番は？」

「もう一度、後攻で良いわ。」

そして、本当の勝負の時が始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2439z/>

探偵学園2年A組第5班

2012年1月8日01時47分発行